

山本勘助ってどんな人？

江戸時代初期の1621年頃までにまとめたとされる軍学書「こうようぐんかん甲陽軍鑑」は、武田信玄・勝頼の二代にわたる事績・合戦・軍法等を記した書物として、江戸時代には武家の教養書として広く読まれていました。この中に、山本勘助は三河牛久保出身と書かれています。しかし、他に明治時代以降の研究で信頼できる古文書や記録に山本勘助の名が登場しないこと、「甲陽軍鑑」がどの程度史実を正しく伝えているかが疑問とされたことにより、山本勘助の存在そのものが疑われました。ところが、1969年（昭和44）に北海道で実在を示す古文書が発見され、存在が確定されました。

山本勘助は、このように存在が疑われたほどですから、生涯の行動を伝える資料は非常に少なく、謎につつまれた人物といえます。そのためか、生誕地や家系をはじめ、軍師としての活躍やその生涯についても、いろいろな説があるようです。



やまもとかんすけ 山本菅助

生年未詳 ～ 永禄4年9月10日（1561年10月18日）

かい はるのぶ 甲斐武田晴信の家臣。菅助，勘助，道鬼斎。

いみな 諱（本名）は晴幸といわれるが確認できない。確実な資料としては、こうじ弘治3年（1557年）6月，えちご越後上杉謙信に攻められたが，これを撃退した信濃国衆計見城主市川藤若に対し，今後は敵が来襲した場合に，すぐ援軍派遣の手はずを整えたと知らせた晴信書状を持参して，口上を述べた使者として登場するのが唯一の所見。「甲陽軍鑑」によれば，うしくぼ三河牛窪の出身で，諸国を見聞して兵法や築城術を研究し，合戦にも数多く参加したが，そのため満身創痍で隻眼，さらに片足も不自由となった。しかも生来の色黒で不器量であったことから，するが駿河国今川氏への仕官を望んだが容れられず，い はら庵原氏のもとで鬱々と過ごしていた。だが板垣信方の招きによって武田晴信（信玄）と対面した。晴信は不器量にもかかわらず，けっしゅつ名高いのは傑出した才能の持ち主の証拠と見て，足軽大将に抜擢した。その後，といし戸石合戦などで活躍するが，えいろく永禄4年（1561年）川中島の合戦で戦死した。

戦国大名辞典（吉川弘文館）より